

【コメント 2】

吉村 良夫 YOSHIMURA Yoshio

美術評論家連盟

- ① 実用的工芸品については古くから「作り手」「売り手」「買い手」「使い手」という熟語が広く使われてきた。しかし作品を見るだけの人については、同様に言いならされた熟語がない。実用を離れた現代造形を制作する工芸家は「見られること」だけを目的としているのだが、工芸品を「見る」人々について、古くから言いならされた熟語がないのは何故だろうか。

「鑑賞者」という用語は歴史が新しく、書き言葉であっても話し言葉になっていない。また、「鑑賞工芸」という熟語に該当する作品は、あくまでも実用品の形をしており、現代造形としては認められていない。「鑑賞」とは、よく見て賞めるという意味である。単純に賞めることを許さない八木一夫「ザムザ氏の散歩」とか、陶器に違いないマルセル・デュシャン「泉」のような現代造形を「見る」ことは、「鑑賞」とは次元の異なる用語を使わなければ作品にふさわしくないだろうが、そのような用語が生まれてこないのは、「見たい」という人々の需要が少ないためではなかろうか。実用無視の現代工芸が、需要のない所へ一方的に供給するという一人よがりになっているのだろうか。

- ② 八木一夫が京都の商工省陶磁器試験所の伝習生だった時代に、同所のデザイン指導員であった工芸家の内田邦夫は「八木君も京都の京展彫刻部に陶彫を出展したことがあるが、入選しなかったと八木君から聞いたことがある。以上の理由で八木君もオブジェ焼きの抽象彫刻の作品は陶芸として発表するようになった」（内田邦夫著『現代工芸を考える』p170-171）と記し、八木のオブジェを彫刻として認めなかった展覧会の当事者を非難している。それから半世紀後の現在、八木のオブジェのような作品を彫刻であると評価した上で企画された展覧会があれば、その最初の例を教えてください。